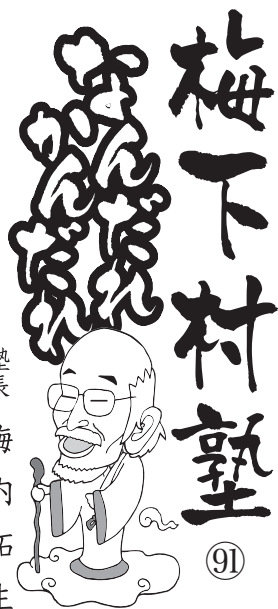


# 「森と水と命の惑星」国際会議

## ～地域と世界の心と魂を詠む～



塾長 梅内 拓生

# 梅下村塾

91

(東海新報記事から)

3月9日(土)の第2面に「気仙坂 命がけの取材を続ける理由」と言う見出しで「彼の名は久保田弘信。戦場カメランである。」

東日本大震災の直後、被災地を訪ね彼と出会い、「知遇を得た」と述べて「シリアでは昨年、女性ジャーナリスト・山本美香さんが銃撃され、落命している。彼も山本さんを送る会に参加した。その時手にした冊子の最後に山本さんの直筆で「ジャーナリストがやることで、最悪の事態を防ぐことが出来る。抑止力」とかかれていたという」と述べている。

3月13日(水)の読売新聞の第1面の編集手帳に「濁点のあるな」で、言葉の意味はとくに変わる。福に徳あり、河豚(フグ)に毒あり、(墓はお参り

のだろうか。

(クロ船シロ船)

3月14日のテレビニュースは国会でのTPP交渉参加への議論が報道されていた。TPP交渉は前の民主党政権から引き継いで来ている。貿易外交が二国間交渉から多国間交渉に変化しているのである。TPPは環太平洋貿易交渉では、交渉が中心となるが、そこには、国の政治力や経済力が交渉力の基盤となることは明らかである。

米国が発案したこのTPPには既に中南米の国々、オーストラリア、ニュージーランド、カナダなどが参加する。日本は一步遅れて参加表明への交渉が始まるのである。幕末の米国のペリー提督が率いる黒船の襲来で江戸幕府を始め日本国中で黒船騒動で世の中が沸騰した記憶がよみがえってきているのかもしれない。

確かに黒船により、幕府は米國と不平等条約を結ばされ、その条約改正まで、数十年の間、日本は苦しんだのである。この歴史の記憶がTPP交渉の議論を沸騰させているの

かもしれない。このよ

うな身に傷を負った交渉の歴史の経験を踏まえ、日本は21世紀の世界の在り方に大きな影響を持つと考えられるTPPに、南太平洋の島々と南米諸国と一緒になって参加して、新しく、国際間の取り決めのモデルの構築に参加することを考えることが時宜を得ていると思う。数千年の歴史を持つ南北アメリカ大陸の先住民やオーストラリア、ニュージーランド、南太平洋の先住民の文化には、独裁国家による統治とは異なる、話し合いによる統治の文化がある。

この文化は構造主義を打ち立てた、フランスのレヴィ・ストロースなど西欧の文化人類学者等によって既に世界に報告されている。日本はこの文化価値の再認識と育成に貢献する時が来ていると思う。この視点に立てば、縄文・蝦夷の子孫である気仙の人々が文化の歴史の深いところ

でつながっている、これらTPPに参加するアジアの先住民の文化価値を共有し、話し合う行動を興すべき時が来ていると思う。

(歴史の記憶と変化)

3月7日(木)の東海新報第8面に「またここで暮らしたい 鎮魂のサン・アンドレス公園 大船渡出身の写真家 荒井令子さん」の津波跡のサン・アンドレス公園を始めとする6枚の写真が掲載されている。

16世紀のスペインとポルトガルは大航海時代のなかで、植民地を世界中に獲得し、拡大して日本にもその手を伸ばそうとしました。先ずカトリックの宣教活動を行って、そこから植民地支配の手を伸ばしてきたことは歴史に記述されている。サン・アンドレス公園は伊達正宗の要請で、大船渡湾を測量していたセバスチャン・ビスカイノが大船渡湾をそう名付けたとされている。

縄文時代にアジアの南と北からの人々との交流、弥生時代、大和朝廷時代、いろいろな国から人々が到来し、室町時代には日本から海外に向けて貿易船が出ていた。室町時代の終わりに、種子島にポルトガル船が漂着し、鉄砲の技術を伝えたと言われている。歴史の流れから何を捉えるか

は、いろいろであるが、数千年の世界から日本に移動してきて、棲みついた人々の立場からの歴史と、それを受け入れてきた(受け入れさせられた)立場の歴史の見方は異なるものがあると思う。

第二次世界大戦前の日本のアジア進出に關しても、進出する側と、される側とはその見方は異なる。過去の歴史から何を学び、何を整理して、何を目指して、どう未来に進むべきか、これは、人類全体が真剣に考えるべき課題である。気仙地方は、これら歴史問題のほかに、地震津波という大きな自然の災害も何度も受けてきている。

古希を越した、年代の私は、何を子孫孫に伝えるべきか、そして何が可能なのか、それは大船渡短歌会、陸前高田短歌会、俳句、川柳、詩の会を始めとするグループの方々と協力し、東海新報社の協力を得て、気仙地方の(歴史の記憶と変化)の奥に潜む魂と心を詠んで「梅下村塾」に掲載して伝えることを目指すことだと思っております。